# ② 長屋門公園整備事業

## 長屋門公園

瀬谷区阿久和には、旧大岡家の長屋門と屋敷林が鬱蒼としたたたずまいで残されていた。大岡氏は、昭和六十二年、市の緑政局と借地公園契約を結び、また、長屋門を歴史的建造物として登録し、私費を投じて長屋門を改修するなどし、市に寄贈した。これをうけて、市は「特色ある公園づくり事業」に位置付け、本格的な整備をすることになった。

公園整備の目標として、①歴史的建造物の保全・活用、②自然環境の向上、③施設の利用運営は地域の住民参加で行う、の三つを掲げた。

## 1 自然環境を大切にする地域の風土

「瀬谷のみどりを守る会」「瀬谷の歴史を考える会」など自然環境や歴史を大切にする活動が長い蓄積をもっている地域であり、公園整備に着手する以前にはつぎのような経緯があった。

昭和六十二年には、整備予定地の水路を下水道局が小川アメニティ事業整備で、両岸を木曽石護岸にしたことで、蛍の生息環境が損なわれ周辺住民の反発をかっていた。また、六十三年には、公園外周部の基盤整備で一部の自然樹林の下草を伐採したため、自然に造詣の深い市民から批判される、ということがあった。

## 2 公園整備にあたっての徹底したヒアリング

工事は、一期工事で屋敷林の部分、二期工事で長屋門と母屋の部分が整備された。二期工事の部分を担当した設計コンサルタントは、地域の様子を可能な限り知ろうとヒアリングを行った。

ヒアリングの目的は、大きく二つあった。ひとつは、将来、使う人の顔ができる限り見えるようにしておきたい、また、使い手の意向をできるかぎり反映し、利用し易い施設としていきたい、ということであった。設計者は、区役所、連合町内会長、そこからの紹介で単位町内会長、地域の活動グループとヒアリングを重ねて行く中で、歴史や緑をテーマにしたいくつかの活発な活動グループと出会い、地域の利用主体のイメージを掴むと同時に、さまざまな要望を聞き取ることができた。

もうひとつは、公園整備の条件のデータ収集に協力してもらう、ということである。もともとあった長屋門や焼失した母屋の形態を探り当てること、当時の使われ方、地域の伝統行事、地域に伝わる昔話、四季折々にやってくる鳥たち、多くの事柄が整備への手がかりとなった。

また、ヒアリングされた住民は、「自分が話したことがどんな風に生かされるのか、待ち遠しい気持ちで開園を待っていた」というように、公園への関心、期待を高めることとなった。

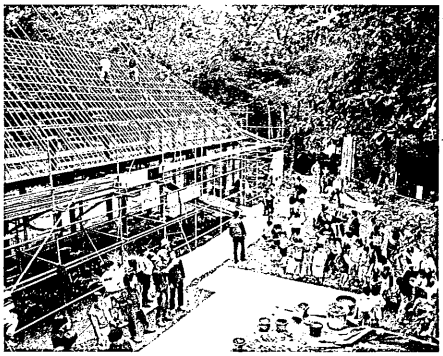
## 3 ヒアリング結果をもとに計画案作成

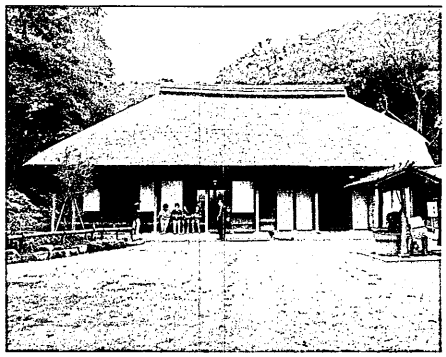
ヒアリングでは、自然を生かした公園、焼失した母屋の代わりとなる長屋門にマッチした古民家の要望が出され、それを取り入れた計画案が作成され、地元説明会が行われた。

周辺整備にあたっては、雑木林の部分には、サンクチュアリのためになるべく手を入れず、道路はドロ舗装する、また、外灯はつけない、など細かい提案がなされ、実現された。細かい提案の実現は、住民の期待と信頼を高めることとなった。

## 4 安西家を譲り受け、古民家が実現

平成二年九月、泉区の古民家を譲り受ける





**データ**

| | |
|---|---|
| 事業主体 | 緑政局建設課 |
| 事業名称 | 長屋門公園整備事業 |
| 所在地 | 瀬谷区阿久和町 |
| 面積 | 3.5ha |
| 事業年度 | 昭和62年から平成3年 |

ことが決まり、十二月には、長屋門、母屋建築工事が発注された。

古民家には、なるべく手を入れないこと、また、市民が見学するだけでなく利用できる施設とする事などの方針のもとに設計案が作られた。長屋門の土蔵の部分には展示室が設けられた。

## 5 建設段階での住民参加―子供と土壁を造る

建設段階における住民参加の試みとして、地元の子供たちの協力を得て、土壁づくりが行われた。元来、民家は集落の人々の共同作業で造られていた。長屋門公園づくりにおいては、そのような伝統的な文化の一部を再現することがふさわしい。また、子供たちにとっては、家づくりにかかわることによって、物を造る仕組みを体験的に学ぶことになり、施設を自分たちの物として愛着をもって利用する契機ともなる、と考えられた。

当日は、事務局の予想を約五倍も上回る子供たちの参加を得て、地域住民の関心の高さを伺わせた。

## 6 管理、運営者に地元の市民が

長年地域の活動をしてきた、地域のネットワーカーである市民がこの施設の設計者と知り合ったのは、ヒアリングの中であった。ヒアリングの中で、設計者は、地域に施設の運営を担う人材のいることを知ることになる。

地元の運営委員会では、長屋門公園の運営をまかされても、なかなか、施設をどう使っていくかイメージが膨らまなかったという。

運営委員の一人であったこの市民は、小学生を対象とした土器づくりや藁草履づくりなど昔の生活を体験する「横浜ふるさと体験スクール」の経験をもち、古民家での利用をイメージすることができた。運営委員会は公園の事務局長の選定の条件として次のような要望を出した。

①地域に明るい、地域に根差した人で、地域住民とうまく交流できる人、②子どもが好きで、教育的な感覚を持ち合わせた人、③昔のことを体験させるプログラムづくりができる人、多少地域の歴史にも詳しい人、④人が好きな人、⑤自然を大切に思う人。

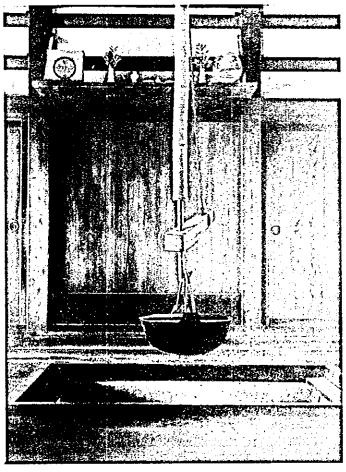
選考の過程で、この条件を満たす、地元の市民が事務局長を引き受ける事となった。

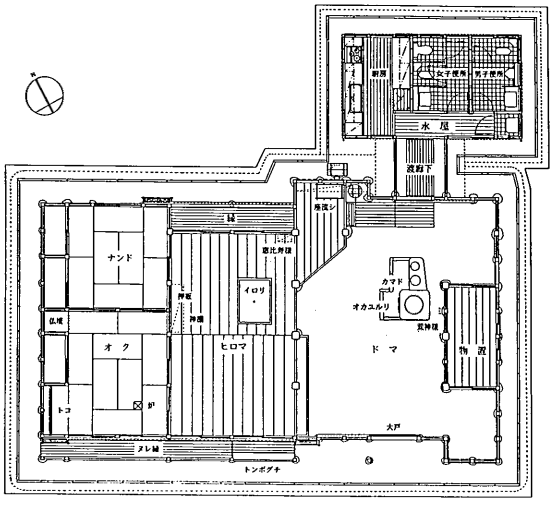
## 7 いろりに火がともり、皆がほっとできる場

この地域の農家のたたずまい、人が暮らす雰囲気の中で、長屋門公園では四季折々の行事が行われ、多くの市民が訪れている。いろりには火がともり、いろりを囲む人々は、旧知の中のようになってしまう。

市民の活動の拠点でもある。リサイクルの基地、子育てグループの活動、老人給食会。開園前からかかわっていた地域の人々は、思い思いのボランティア活動で、薪割り、掃除、雑木林の管理を行っている。

またこれを支える公園事務所、区役所との理解ある連携も欠かせない条件となっている。






図―1 主屋平面図

◎旧安西家母屋

江戸中期後半に建造されたといわれている。泉区和泉町から移築復元した。市内に残されている茅葺き民家としては九指に入る文化財にもなり得る貴重な茅葺き民家である。建築面積150㎡、高さ6.9m、平屋建て。

公園の5つのゾーニング

●歴史・体験ゾーン

長屋門公園の正面の顔であり、最も歴史性が感じられる場所でもある。既存の長屋門、文庫蔵を改修し、焼失した母屋の代わりに泉区から江戸時代の茅葺き民家を移築風景復元して、かつての農家の暮らしが営まれていたときのように歴史を感じさせた。

●せせらぎゾーン

湧水を利用した流れと池を整備して、メダカやドジョウを放流した結果、カルガモやシラサギも飛来し、トンボも飛び交うなど街なかではめずらしい風景を醸し出す。流れの脇は梅園として整備し、梅の木の下は畑とした。

●自然観察ゾーン

野鳥や昆虫が生息でき、また、野鳥や野草を観察できるようにほとんど手をつけない保存樹林として保全した。

●雑木広場ゾーン

雑木林の中で子供たちが木の温もりを感じながら冒険心が芽生えるような広場として整備した。

●散策ゾーン

杉木立の下で時の経つのも忘れ、のんびりと散策休息のできる園路を整備した。